

ハンセン病とは…

ハンセン病は、“らい菌”による慢性の感染症で、末梢神経がおかされる病気ですが、皮膚がおかされることも多く、他の組織がおかされることもあります。

“らい菌”は結核菌に似た細菌ですが、結核菌よりもはるかに感染力が弱く、よほど“らい菌”に対する抵抗力の弱い状態で、しかも繰り返して接触しなければ感染することはなく、感染しても発病するのはごく一部の人に過ぎません。明治以来ハンセン病療養所で働いた職員でハンセン病になった人は一人もなく、どんなに感染しにくい病気かが実証されています。

また、仮に発病したとしても、治療法が確立されている現在では、早期発見と早期治療により、障害を残すことなく完治する病気となりました。

ハンセン病のかつての病名は「らい」で、長い間人々は「らい」に対して偏見と差別を持ち続けてきたために、正しい認識をもってほしいという願いから“らい菌”の発見者ノルウェーの医学者ハンセン博士の名をとってハンセン病と改められました。



- 遺伝病ではありません。
- 感染力の極めて弱い病原菌による慢性の感染症です。
- 乳幼児のときの感染以外はほとんど発病の危険性はありません。
- 不治の病気ではなく、結核と同じように治癒する病気です。
- 治癒したあとに残る変化は単なる後遺症に過ぎません。
- 早期発見と適切な治療が患者にとっても公衆衛生上からも重要です。